

肉筆浮世絵制作の一様態 — 国立歴史民俗博物館所蔵「浅草風俗図巻」から —

大久保純一

One approach to the production of ukiyo-e paintings — from the painting scroll "Genre Scenes of Asakusa" in the National Museum of Japanese History —

はじめに

- ① 歴博本「浅草風俗図巻」について
- ② 絵師の見世
- ③ 寺社の門前と絵師の作画
- ④ 懐月堂への連想

おわりに

〔論文要旨〕

国立歴史民俗博物館所蔵「浅草風俗図巻」(仮称)は、隅田川の船遊びから駒形堂を経て浅草寺の参道及び境内の風俗を描いた肉筆浮世絵である。菱川派の強い影響を受けたこの画卷は、元禄末から宝永頃に制作されたと推定されるが、浅草寺門前並木町にある絵師の見世の描写が、その頃の肉筆浮世絵制作の一様態を描き出したものとして注目される。

参詣客の行き来する往来に向かって開け放たれた店の中ではまさに絵師が制作の最中であり、見世の前に設けられた柵には、寄りかかって絵師の制作の様子を興味深く見物する人々の姿が描かれている。この場面のように、寺社の境内や門前などの盛り場で、制作の様を観衆に対して公開していた絵師には、享保期に芝神明宮の境内で「女流」と「少女」を売り物に活動していた山崎女龍がおり、後年のものだが他にも画証・文献を通して書画の分野で似

たような事例を挙げることができる。

「浅草風俗図巻」の絵師の見世の中には、懐月堂風の美人画が貼られているが、掲を効かせた描線でバターン化した姿態を形づくるこの美人画様式は、観衆の面前での即書きにきわめて適したものである。懐月堂風の創始者である安度は、その作風から絵馬描きの絵師出身であるという推測もなされているが、絵馬描きが寺社の門前において参詣客に制作の光景を見せていた例も文献で確認できる。安度は宝永年間にはその作風を形成していたと考えられ、また伝えられる住居は浅草諏訪町である。「浅草風俗図巻」中の絵師のイメージには、安度の制作の姿が重ね合わされていると推測することができ、またそうでなくとも、江戸時代前期における肉筆浮世絵制作の一様様を示唆するものとして貴重である。